

第1559回 (11月24日)

短歌にみる現代農民の心情分析

相 川 良 彦

1. 問題意識と短歌の性格づけ

農民自身の記録を記述形態に即して整理すれば、農民意識を主体的な姿でリアルに捉えることが出来るだろう。そうした農民記録の一形態で広範に農民に普及したものとして、短歌がある。本報告は、農業月刊誌3誌に過去12年間に掲載された短歌の中で特に家族員の詠み込まれた短歌のみを取り上げ、そこに現れた農民心情の一面を明らかにする。

短歌は五七五七七という短い音律の中に詠み人の感動を表現する詩歌の一形式である。読み人が、31文字(定型)の中に、その心情を込めようとするとき、そこに焦点の設定および些細な説明記述の省略という2事が必要になる。そして、この省略された句と句との交叉するところに想像力が働き、訴えたい焦点が返ってくっきりと浮かび上がる、という仕組みになっている。ただ、定型(短さや形式)の制約により短歌に盛り込まれる心情が画一的・断片的なものになるという傾向を持つことも留意されるべきだろう。

2. 分析

意味内容と文体形式との2側面から分析する。心情は意味内容と深くかかわるが、分析者の主観に左右される度合いも大きい。そこで、詠み手が無意識に採用するところの文体形式と短歌に込められた主題との関連性を統計分析し、短歌に現れる農民心情を次のように整理し、結論づけた。

(1) 1首の短歌には一つの訴えたい主題を中心に構成されている。それを第1に、労働賛歌、叙景詩、農業や生活の喜び、楽しさ、家族員間の愛や信頼などを歌った現状肯定感、第2は、悲嘆や苦悩、虚しさ、挽歌、家族員間の人間関係のあつれきなどの現状否定感、

の2種類に大別する。また、形態的な分類である抒情歌、労働歌、叙景歌の3類型を補足的に使用する。

(2) 1首の短歌は3~10前後の語群からなる。その歌中に使用される語群を、意味の範囲によって17項目に区分けする。そして、1首の短歌においてこれら異なる範囲の各句が交叉することによって、詠み手の訴えたい感動がより強められることになる。他方で、異質な意味をもつ語群により構成される短歌はそれ故に解釈において多義的であり、そこに余韻もまた生じるのである。

(3) 短歌の主題は、歌中に使用される語群の意味と、当然ながら密接な連関をもっている。しかし、語群の意味の範囲は分析者の主観により分類されたものなので、より客観性の確かなものとして、短歌の文体形式に着目する。そして、主題と文体形式との間に一定の対応関係を見出す。具体的には、①主語が「私」の場合、他へ働きかける能動的な事柄の描写が多いのに対し、事物が主語になると、その事物の動きやあり様が客観的・静態的に描写される傾向にある。②人格名詞が主語になると、一首全体が主語を中心として文体形式的にも統一されるものが多いのに対し、事物等が主語だとそうした形式的統一性は減ってしまう。つまり、肯定的な短歌は、人間が主体となる能動的なものが多く、歌全体も文体形式からみてまとまりが良い(統辞的)。同様に、③抒情歌は労働歌に比べて、強調構文が多く、登場人物では親子、祖先・子孫が多いのである。情緒性、抽象性が強いであろう。